

穂崎中次戸遺跡
穂崎鳥井遺跡
穂崎塩辛遺跡
備前国分尼寺跡
池新田遺跡
赤坂遺跡

県営穂崎地区・穂崎西地区
圃場整備事業に伴う確認調査

2010年

岡山県赤磐市教育委員会

序

本書は、岡山県赤磐市穂崎に所在する穂崎中次戸遺跡・穂崎鳥井遺跡・穂崎塩辛遺跡・備前国分尼寺跡・池新田遺跡・赤坂遺跡の確認調査および工事立会の結果を収載した報告書です。

この調査は、県営山陽町穂崎地区圃場整備事業および穂崎西地区圃場整備事業に先立ち、事業予定地内にある埋蔵文化財の基礎資料を得ることを目的としております。そして、その調査成果に基づき、埋蔵文化財の保護・保存と圃場整備事業との調整を図るために実施したものであり、穂崎地区は平成12年度国庫補助事業として行われました。

赤磐市は岡山県の南東部に位置し、温暖な気候によって豊かな大地の恵みを古くから享受してきました。こうした環境により、市内には数多くの文化財が残されています。特に今回調査対象となった穂崎地区周辺には、国史跡両宮山古墳や備前国分寺跡が存在しており、この地が備前地域の政治と文化の中心地であったことを物語ります。

調査の結果、北方に延びる丘陵斜面部と裾部に弥生時代から古墳時代の集落の存在が明らかとなり、また、備前国分尼寺が建立されていたとされる仁王堂池周辺では、遺構や瓦類などの遺物が認められました。これらの成果を収めた本書が文化財の保護・保存のために活用され、また地域の歴史を学ぶ上で広く役立つならば幸いに存じます。

発掘調査の実施、報告書の作成にあたりましては、地元の方々をはじめ関係各位から多大なご指導とご協力を賜りました。厚くお礼申し上げます。

平成22年3月

赤磐市教育委員会
教育長 土井原 敏郎

例　　言

- 1 本書は岡山県赤磐郡山陽町穂崎地区圃場整備ならびに穂崎西地区圃場整備事業に伴い、山陽町教育委員会が山陽町役場の依頼を受け、平成12年度に確認調査を実施した穂崎中次戸遺跡・穂崎鳥井遺跡・穂崎塩辛遺跡、平成16年度に確認調査を実施した備前国分尼寺跡・池新田遺跡・赤坂遺跡の発掘調査報告書である。なお、平成12年度の確認調査は国庫補助事業の交付を受けて実施した。赤磐郡山陽町は平成17年3月7日に赤磐郡内の赤坂町・熊山町・吉井町と合併して、現在は赤磐市の一部となっているが、必要に応じて地名や組織名などは、事業当時の表記を行う。
- 2 平成12年度調査の穂崎中次戸遺跡は岡山県赤磐市穂崎1001-1ほか、穂崎鳥井遺跡は同市穂崎1141ほか、穂崎塩辛遺跡は同市穂崎1175ほかに所在する。平成16年度調査の備前国分尼寺跡は赤磐市穂崎214ほか、池新田遺跡は同市穂崎540-1ほか、赤坂遺跡は同市穂崎309-1ほかに所在する。
- 3 平成12年度の確認調査は、山陽町教育委員会職員 塩見真康が行い、平成16年度の確認調査は、同職員 宇垣匡雅・大熊美穂・有賀祐史が担当した。平成12年度の調査面積は350m²、平成16年度は130m²である。平成20年度に行った工事立会は、赤磐市教育委員会 有賀祐史が担当した。
- 4 報告書の作成・執筆は、平成12年度に塩見、平成16年度に宇垣・大熊・有賀が山陽町教育委員会において、平成21年度に赤磐市教育委員会 澤山孝之、有賀が赤磐市教育委員会においてそれぞれ担当して行った。全体の編集は、平成21年度に澤山が赤磐市教育委員会において行った。
- 5 本書に関連する出土遺物ならびに図面・写真等は、赤磐市教育委員会（岡山県赤磐市下市337番地）に保管している。

凡　　例

- 1 報告書の第3・4・12・13・20図の北方位は、平面直角座標第V系（世界測地系）の座標北であり、そのほかの構図は磁北を示している。調査地周辺における磁北線偏差は西偏7°7'を測る。また、報告書抄録に記載した経緯度は世界測地系に準拠している。高度はすべて海拔高である。
- 2 遺構・遺物実測図の縮尺率は次のとおり統一しており、各図に縮尺率を明記している。なお、遺物番号は掲載順にしたがって、通し番号を用いた。

遺構　トレンチ平・断面：1/80	遺物　土器・埴輪・瓦：1/4
------------------	----------------
- 3 土層断面図のみ掲載したものの方位は、必要に応じて次のとおり略称を用いて表示している。

東：E (East)	西：W (West)	南：S (South)	北：N (North)
------------	------------	-------------	-------------
- 4 土器実測図のうち中軸線の左右に白抜きのあるものは、口径の推定が困難なものである。
- 5 土層断面図に使用した土色は、基本的に各調査担当職員の肉眼観察によるものである。
- 6 第2図は、国土地理院発行1/50,000地形図の「和気」・「岡山北部」を、第3・4・12・13・20図は、山陽町作成1/2,500地形図をそれぞれ複製・縮小・加筆したものである。
- 7 報告書の時代・時期区分は一般的な政治史区分に準拠し、それを補うために文化史的区分、西暦・世紀などを併用している。

目 次

序

例言・凡例

目次

第1章 地理的・歴史的環境	1
第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	1
第2章 発掘調査および報告書作成の経緯と経過	5
第1節 調査にいたる経緯	5
第2節 調査および報告書作成の体制	5
第3章 発掘調査の概要	6
第1節 穂崎地区圃場整備予定範囲調査の遺構と遺物	6
第2節 穂崎西地区圃場整備予定範囲調査の遺構と遺物	16
第3節 穂崎西地区圃場整備工事立会の遺構と遺物	24

図版

報告書抄録

奥付

図 目 次

第1図 遺跡位置図 (1/2,000,000)	1	第14図 穂崎西地区T 1 平・断面図 (1/80)	18
第2図 調査区周辺遺跡分布図 (1/50,000)	2	第15図 穂崎西地区T 2 ~ 4 平・断面図 (1/80)	19
第3図 調査区周辺主要遺跡位置図 (1/12,000)	3	第16図 穂崎西地区T 5 ~ 8 平・断面図 (1/80)	20
第4図 穂崎地区トレンチ配置図 (1/8,000)	7	第17図 穂崎西地区T 9 ~ 13 平・断面図 (1/80)	21
第5図 穂崎地区T 1 断面図 (1/80)	8	第18図 穂崎西地区T 14 ~ 17 平・断面図 (1/80)	22
第6図 穂崎地区T 2 ~ 4 平・断面図 (1/80)	9	第19図 穂崎西地区出土遺物 (1/4)	23
第7図 穂崎地区T 5 ~ 8 平・断面図 (1/80)	10	第20図 穂崎西地区遺跡範囲図・工事立会 位置図 (1/5,000)	24
第8図 穂崎地区T 9 ~ 12 平・断面図 (1/80)	11	第21図 穂崎西地区工事立会土層柱状図① (1/80)	25
第9図 穂崎地区T 13 ~ 15 平・断面図 (1/80)	12	第22図 穂崎西地区工事立会土層柱状図② (1/80)	25
第10図 穂崎地区T 16 ~ 20 断面図 (1/80)	13	第23図 仁王堂池北東部周辺表採遺物① (1/4)	26
第11図 穂崎地区出土遺物 (1/4)	14	第24図 仁王堂池北東部周辺表採遺物② (1/4)	27
第12図 穂崎地区遺跡範囲図 (1/8,000)	15	第25図 仁王堂池北東部周辺表採遺物③ (1/4)	28
第13図 穂崎西地区トレンチ配置図 (1/5,000)	17		

図版目次

- | | | | |
|----------|----------------------|---|----------------------------|
| 図版 1 - 1 | 穂崎地区調査前全景（南西から） | 4 | 穂崎西地区 T16B 完掘状況
(南東から) |
| 2 | 穂崎地区調査風景（北東から） | 5 | 穂崎西地区工事立会地点全景
(南西から) |
| 3 | 穂崎地区 T 3 完掘状況（南西から） | 6 | 穂崎西地区工事立会 C 地点土層
(南東から) |
| 4 | 穂崎地区 T 4 完掘状況（南から） | 7 | 穂崎西地区工事立会 F 地点土層
(北から) |
| 5 | 穂崎地区 T13 完掘状況（南東から） | 8 | 穂崎西地区工事立会 H 地点土層
(北西から) |
| 6 | 穂崎地区 T15 完掘状況（北から） | | |
| 7 | 穂崎西地区調査風景（西から） | | |
| 8 | 穂崎西地区 T 1 完掘状況（南から） | | |
| 図版 2 - 1 | 穂崎西地区 T 1 柱穴（南東から） | | |
| 2 | 穂崎西地区 T 5 完掘状況（南から） | | |
| 3 | 穂崎西地区 T13 完掘状況（北東から） | | |

第1章 地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

赤磐市は岡山県南東部に位置しており、広義での岡山平野の北東側にあたる。市域をみると北側は吉備高原から続く赤磐丘陵地が広がり、東側には吉井川が、西側には市域と近接して旭川がそれぞれ南流している。また、市西部には砂川が貫流しており、これらの河川や支流に沿って盆地状の平野が形成され、丘陵と平地が入り組んだ地形となっている。

この砂川中流域の沖積平野の広さは、東西約5.5km、南北約6.3kmをはかる。海拔は11～25m、周囲を標高200～300mの山々に囲まれており、東側の丘陵は比較的低い。東方には可真の盆地状の平地、南方には岡山市東区瀬戸町北西部の盆地状の平地、南西方向には龍ノ口山塊を隔てて旭川下流域東岸の平野がそれぞれ広がっている。遺跡の多くはこのような河川に沿って形成された平野もしくは平野に面した丘陵の先端に形成されており、今回の確認調査の対象地もこうした立地に該当している。

第2節 歴史的環境

旧石器時代・縄文時代

確認調査の対象地である穂崎地区の所在する赤磐市南西部の砂川中流域の沖積平野では、これまでのところ旧石器時代の明確な遺構や遺物は確認されていない。

縄文時代の遺跡としては、備前国分寺跡（1）の発掘調査から深鉢や有舌尖頭器・石錐・石錘などの石器が確認されている。なかでも有舌尖頭器は、現在までに該地で確認されている遺物では最も古い草創期のものである。このほか、斎宮遺跡（2）からは後期の土器のほか、土壤状の遺構から晩期の土器と軟玉製丸玉が出土している。南方前池遺跡（3）からは堅果類を貯蔵した晩期の貯蔵穴がまとめて検出された。吉原遺跡（4）からは晩期の石棒が出土している。

弥生時代

弥生時代の遺跡としては、先述の南方前池遺跡に加えて、山陽小学校遺跡（5）から前期の土器が出土しており、この時期から集落が沖積平野へと進出・増加していく様子が窺える。

中期に入ると、数多くの集落が出現したことが確認されている。特に中期中葉から後期初頭にかけては、丘陵の尾根や斜面などの比較的高所に立地しているものが多い。東高月丘陵に立地する中期後半の代表的な集落遺跡としては、数多くの堅穴住居群が確認された用木山遺跡（6）、堅穴住居群が検出された憩園遺跡（7）、弥生時代中期から古代にかけて続く門前池遺跡（8）などの遺跡が挙げられる。



第1図 遺跡位置図(1/2,000,000)



- | | | | |
|------------|-------------|-------------|------------|
| 1. 備前国分寺跡 | 12. 門前池東方遺跡 | 23. 丣宮山古墳 | 34. 馬屋森向遺跡 |
| 2. 竜富遺跡 | 13. 浦山遺跡 | 24. 和田茶臼山古墳 | 35. 馬屋出水遺跡 |
| 3. 南方前池遺跡 | 14. 四辻峠遺跡 | 25. 正免東古墳 | 36. 馬屋長田遺跡 |
| 4. 吉原遺跡 | 15. 爾石山遺跡 | 26. 森山古墳 | 37. 馬屋遺跡 |
| 5. 山陽小学校遺跡 | 16. 便木山遺跡 | 27. 朱千駄古墳 | 38. 高月条里遺構 |
| 6. 用木山遺跡 | 17. 用木古墳群 | 28. 小山古墳 | 39. 三藏烟遺跡 |
| 7. 慧岡遺跡 | 18. 野山古墳群 | 29. 翫り山古墳 | 40. 葛木城跡 |
| 8. 門前池遺跡 | 19. 斉戸池東古墳群 | 30. 宮山古墳群 | 41. 沼田城跡 |
| 9. 稔崎中次戸遺跡 | 20. 正崎古墳群 | 31. 別所古墳群 | 42. 正崎城跡 |
| 10. 稔崎鳥井遺跡 | 21. 中島1号墳 | 32. 備前国分尼寺跡 | 43. 池新田遺跡 |
| 11. 稔崎塩辛遺跡 | 22. 岩田3号墳 | 33. 高月駅家推定地 | 44. 赤坂遺跡 |

第2図 調査区周辺遺跡分布図 (1/50,000)

後期の集落は中期に比べて、谷口や山裾の微高地などに立地する大規模なものが多くなる。中期から続く門前池遺跡のほか、門前池東方遺跡（12）や弥生時代から中世まで続く集落跡の斎富遺跡、大量の土器が出土した浦山遺跡（13）などが確認されている。

一方、墳墓も数多く確認されており、中期の台状墓である四辻峠遺跡（14）、後期の方形台状墓9基などが検出された愛宕山遺跡（15）、特殊器台・壺を伴う土壙墓群が検出された便木山遺跡（16）などが挙げられる。

古墳時代

東高月丘陵上では用木古墳群（17）の出現以後、数多くの古墳が築造された。13基の古墳からなる野山古墳群（18）、齊戸池東古墳群（19）なども前～中期古墳の可能性が強い。発掘調査が行われた古墳としては、正崎1号墳（円墳・15m）（20）や、墳裾を取り巻くように木棺・土壙墓が多数設けられていた中島1号墳（円墳・18m）（21）が挙げられる。

中期中葉には岩田3号墳（方墳・21m）（22）が築造され、中期後葉には吉備の三大巨墳の一つ、全長206mを測る巨大な前方後円墳の両宮山古墳（23）が築造される。両宮山古墳は後円部径116m、後円部高さ23.6m、前方部長110mを測り、墳丘を包む二重周濠の外濠と内濠の間に幅25m前後の中堤がめぐる。両宮山古墳に近接して、二重周濠を有する和田茶臼山古墳（帆立貝形古墳・全長55m）（24）、正免東古墳（円墳？・約25m）（25）、森山古墳（帆立貝形古墳・82m）（26）が築造された。後期初頭には朱千駄古墳（前方後円墳・85m）（27）、続いて小山古墳（前方後円墳・58m）（28）が、後期前半



第3図 調査区周辺主要遺跡位置図 (1/12,000)

には廻り山古墳（前方後円墳・47m）（29）が築かれた。

その他、首長墳とは異なるが、銅鏡、三環鉢、鉄刀、甲冑などが出土した径約20×16mの円墳の正崎2号墳（20）や宮山4号墳（方墳・19×14m）（30）、別所古墳群（31）などは、小規模の古墳ながら多くの副葬品が埋葬されていた。集落では、門前池遺跡、朝鮮半島系の遺物が多数出土した門前池東方遺跡、斎富遺跡などが挙げられる。

古代

天平10（741）年の聖武天皇の詔勅を受けて造営された備前国分寺跡と備前国分尼寺跡（32）が所在する。備前国分寺跡は東西約175m、南北約190mの規模を有し、国分寺式の伽藍配置を採っている。中門と講堂は、金堂を囲むように複廊でつながれている特徴をもつ。備前国分寺跡の南西には、古代山陽道の高月駅家推定地（33）が所在する。高月駅家は赤磐市松木周辺に想定される「珂磨駅」と「津高駅」の間に位置するとされる。

高月駅家周辺に立地する馬屋森向遺跡（34）では、平安時代以前の古道と推測される遺構が検出されたほか、平城宮式（6225型式系）の1点を除く軒丸瓦はすべて備前国分寺の創建瓦と同文であった。馬屋出水遺跡（35）、馬屋長田遺跡（36）からは、官衙との関係が推定される奈良時代の遺物や遺構が検出されている。奈良時代から室町時代前半を中心とした集落跡の馬屋遺跡（37）からは多数の建物群とともに、備前国分寺と関連すると思われる奈良時代以降の溝2条が検出されている。また、馬屋地区から河本地区にかけての水田地帯では、条里の痕跡が残る高月条里遺構（38）が確認されている。

このほか、門前池遺跡からは奈良時代から平安時代にかけての10棟以上の建物跡が検出され、陶器などが出土している。斎富遺跡では、奈良時代の掘立柱建物24棟や区画溝のほか、平安時代の火葬墓などが確認されている。

中世以降

平安末期に鳥取郷は、在地領主の葛木氏によって鳥取荘として開発され、長講堂領となった。長講堂は後白河法王の持仏堂であり、長講堂に寄進することで国衙の徵税を逃れ、領主として資産を固めた。建久2（1191）年の長講堂所領注文によると、鳥取荘には御簾・御座・砂・布・門兵士・移花などが譲せられていた。このような莊園は南北朝の動乱の中で、事実上在地武士の所領と化していった。

備前国分寺の南側に位置する馬屋遺跡では、古代より室町時代前半まで広大な集落および墓が続く。三蔵畠遺跡（39）では鎌倉時代の土師器窯跡が確認されており、土師器土鍋類を中心に数多くの遺物が出土した。弥生時代から中世まで続く斎富遺跡でも、室町時代後半期と思われる掘立柱建物15棟が確認されている。また、葛木氏が在城したと伝えられる葛木城跡（40）をはじめとした中世山城が建てられ、戦国時代に下ると、浦上氏の勢力が伸びてきて沼田城跡（41）や正崎城跡（42）などが築かれていた。

参考文献

『森山古墳 両宮山古墳』山陽町文化財調査報告 第2集 岡山県山陽町教育委員会 2004

『両宮山古墳』赤磐市文化財調査報告 第1集 岡山県赤磐市教育委員会 2005

『史跡両宮山古墳中堤保存工事報告書』赤磐市文化財調査報告 第2集 岡山県赤磐市教育委員会 2008

『備前国分寺跡』赤磐市文化財調査報告 第3集 岡山県赤磐市教育委員会 2009

*『備前国分寺跡』の第2章第1節に、他崎中次戸遺跡・他崎鳥井遺跡・他崎塩辛遺跡出土遺物を一部掲載している。

第2章 発掘調査および報告書作成の経緯と経過

第1節 調査にいたる経緯

山陽町から同教育委員会に対して、山陽町穂崎地区28.4haを対象とする県営穂崎地区圃場整備事業予定地内に関する埋蔵文化財の取扱いについての照会があり、文化財調査等の必要性についての協議依頼を受けた。対象範囲となった穂崎地区には、周知の遺跡として穂崎中次戸散布地と花熊丘陵散布地の2ヵ所の散布地が確認されていた。

そのため、事業予定地内は埋蔵文化財包蔵地が含まれており、また、未周知の遺跡が存在している可能性があることから、事前の確認調査が必要であるとし、確認調査により遺跡が確認された場合には、本格的な発掘調査あるいは工事の設計変更等を含めた協議を別途行う旨の回答を行った。

こうした動きを受けて、事業予定地内に想定される埋蔵文化財の取扱いについて、山陽町、同教育委員会による協議が行われた結果、工事着手前に確認調査を実施し、その成果により埋蔵文化財の保存に支障のない圃場整備計画を策定することを申し合わせした。この協議に基づき、山陽町教育委員会は事業予定地内における埋蔵文化財の状況を把握し、保存のための基礎資料を得るために、平成12年6月12日から国庫補助事業を受けて、確認調査を実施することになった。

県営穂崎西地区圃場整備事業については、山陽町穂崎西地区17.2haを対象とする事業予定地内に関する埋蔵文化財の取扱いについての照会があり、文化財調査等の必要性についての協議依頼を受けた。対象範囲となった穂崎西地区には、周知の遺跡として備前国分尼寺跡・池新田遺跡と赤坂散布地が確認されていた。その後は、先述の穂崎地区圃場整備事業と同様の経過を辿り、平成16年11月4日から確認調査を実施することになった。

第2節 調査および報告書作成の体制

穂崎地区的確認調査は、山陽町教育委員会が平成12年6月12日から8月10日まで実施した。担当調査員は1名であった。調査対象地は、周知の穂崎中次戸散布地と花熊丘陵散布地である。穂崎西地区的確認調査は、同教育委員会が平成16年11月4日から12月1日まで実施した。担当調査員は3名であった。調査対象地は、周知の備前国分尼寺跡・池新田遺跡と赤坂散布地である。それぞれの確認調査の終了後は、担当調査員により実績報告書の作成を行い、事業予定地で確認された埋蔵文化財の今後の取り扱いについて、山陽町に所見を加えて報告し、事業調整を行った。

平成20年度には穂崎西地区的圃場整備事業が開始されたが、実績報告書でかなりの遺物の出土が予測されたとして備前国分尼寺跡周辺については、赤磐市教育委員会の担当職員1名が工事立会にあたり、適宜、指導および記録作成を行った。

報告書の作成は平成21年度に赤磐市教育委員会において、整理担当者1名があつた。執筆は穂崎西地区的工事立会を担当職員、その他を各実績報告書に基づいて整理担当者が取りまとめた。

第3章 発掘調査の概要

第1節 穂崎地区圃場整備予定範囲調査の遺構と遺物

T 1 (第4・5図)

主軸を北西—南東方向に設定し、調査規模は $2 \times 5\text{ m}$ である。第6層は中世包含層、第8層は地山である。遺構は確認されず、中世以降の削平を窺わせる。遺物は弥生土器片・石鎌が少量出土した。

T 2 (第4・6図)

主軸を北西—南東方向に設定し、調査規模は $2 \times 10\text{ m}$ である。第4層は人工的な盛土で、第8層は中世包含層、第10層は古代包含層、第11層は地山である。遺構は確認されず、中世以降の削平が考えられる。旧地形は南から北に下がっていたと思われる。遺物は弥生土器片・石鎌が少量出土した。

T 3 (第4・6・11図・図版1-3)

主軸を北東—南西方向に設定し、調査規模は $2 \times 10\text{ m}$ である。第4層は古代包含層、第5層が地山である。時期・性格が判然としない溝状、ピット状の遺構がみられ、旧地形は南西から北東に下がっていたと思われる。遺物は弥生土器・須恵器・土師質土器片・石鎌が少量出土した。

T 4 (第4・6図・図版1-4)

主軸を北—南方向に設定し、調査規模は $2 \times 5\text{ m}$ である。第5層は地山である。溝状、ピット状の遺構がみられるが、地山に達する中世以降の削平も認められるため、時期・性格ともに判然としない。遺物は弥生土器・土師器片がわずかに出土した。

T 5 (第4・7図)

主軸を東—西方向に設定し、調査規模は $2 \times 10\text{ m}$ である。第3層は地山である。遺構は確認されず、地山に達する中世以降の削平を窺わせる。出土遺物は認められなかった。

T 6 (第4・7図)

主軸を東—西方向に設定し、調査規模は $2 \times 10\text{ m}$ である。第4層は中世包含層であり、第6層は地山である。遺構は確認されず、中世以降の削平が考えられる。旧地形は東から西に下がっていたと思われる。遺物は弥生土器・須恵器片がわずかに出土した。

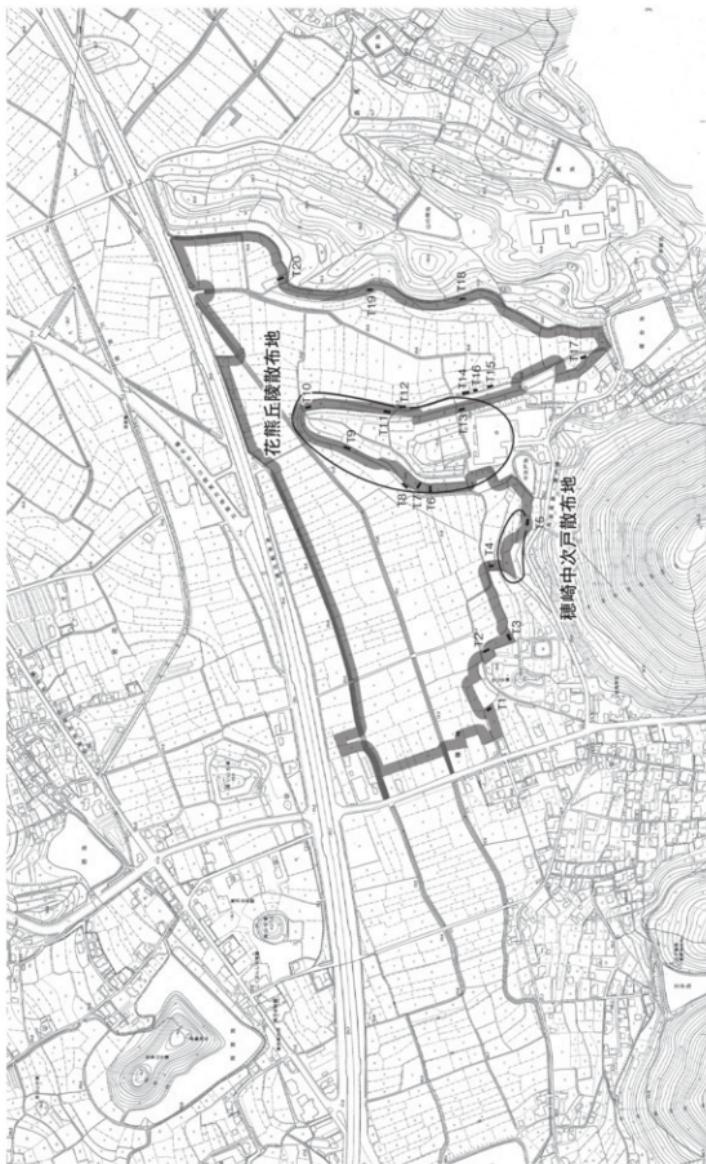
T 7 (第4・7図)

主軸を北西—南東方向に設定し、調査規模は $2 \times 10\text{ m}$ である。第6層は地山である。溝状、ピット状の遺構がみられるが、地山に達する中世以降の削平も認められるため、時期・性格ともに判然としない。

旧地形は南東から北西に下がっていたと思われる。遺物は須恵器片がわずかに出土した。

T 8 (第4・7・11図)

主軸を北東—南西方向に設定し、調査規模は $2 \times 10\text{ m}$ である。第3層は古代包含層であり、第5層は地山である。遺構はトレンチ南西側で幅約 2.2 m の南北方向に延びる溝（旧河道）やピットを検出した。遺物は弥生土器・土師器・須恵器片・石鎌がまとめて出土した。



第4図 稲崎地区 トレンチ配置図 (1/8,000)(太線範囲は事業計画区域を示す)

T 9 (第4・8図)

主軸を北—南方向に設定し、調査規模は $2 \times 10\text{m}$ である。第3層は地山である。遺構は確認されず、後世の削平が認められる。遺物は出土しなかった。

T 10 (第4・8図)

主軸を北—南方向に設定し、調査規模は $2 \times 10\text{m}$ である。第6層は地山である。遺構は確認されず、後世の削平が認められる。遺物は出土しなかった。

T 11 (第4・8図)

主軸を北—南方向に設定し、調査規模は $2 \times 10\text{m}$ である。第4・5層は地山である。遺構はトレンチ北西側にたわみがみられるが、後世の削平が認められるため、時期・性格ともに判然としない。遺物は出土しなかった。

T 12 (第4・8図)

主軸を北—南方向に設定し、調査規模は $2 \times 10\text{m}$ である。第4層は遺物包含層であり、第7層は溝の埋土、第9層は地山である。中世以降の削平を窺わせる。遺構はトレンチ南側で幅約90cmの東西方向に延びる溝やたわみを検出した。遺物は弥生土器片がわずかに出土した。

T 13 (第4・9図・図版1-5)

主軸を北—南方向に設定し、調査規模は $2 \times 10\text{m}$ である。第6層は地山である。遺構はトレンチ南東側にはたわみがみられるが、地山に達する中世以降の削平も認められるため、時期・性格ともに判然としない。遺物は出土しなかった。

T 14 (第4・9・11図)

主軸を北—南方向に設定し、調査規模は $2 \times 10\text{m}$ である。第3層は古代包含層であり、第5層は地山である。遺構はトレンチ中央付近では直径約60cmの柱穴3基を検出した。遺物は弥生土器・土師器片がまとまって出土した。

T 15 (第4・9図・図版1-6)

主軸を北—南方向に設定し、調査規模は $2 \times 10\text{m}$ である。第4層は古代包含層であり、第6・7層は遺構の埋土、第8層は地山である。遺構はトレンチ中央付近では幅約2.5mの北西—南東方向に延びる溝や直径約60cmの柱穴1基を検出した。遺物は弥生土器・土師器片・石礫がまとまって出土した。

T 16 (第4・10・11図)

主軸を北—南方向に設定し、調査規模は $2 \times 5\text{m}$ である。第5層は古代包含層、第6層は地山である。遺構は確認されなかった。遺物は弥生土器・土師器・土師器片・石礫が多量に出土した。

T 17 (第4・10図)

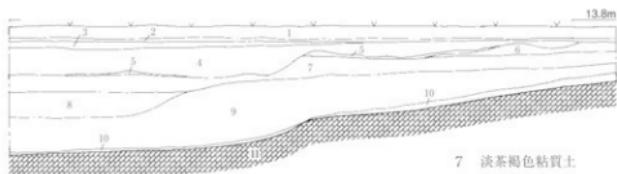
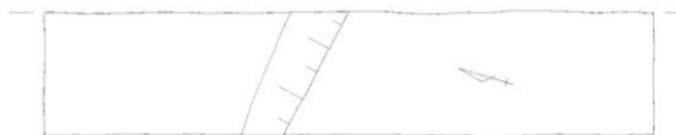
主軸を北—南方向に設定し、調査規模は $2 \times 5\text{m}$ である。土層断面のうち第4層は地山である。遺構は確認されず、後世の削平が認められる。遺物は出土しなかった。

T 1



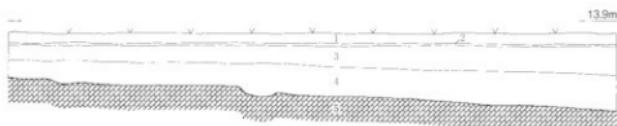
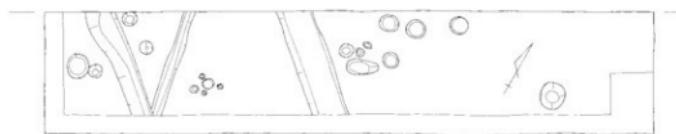
第5図 穂崎地区 T 1 断面図 (1/80)

T 2



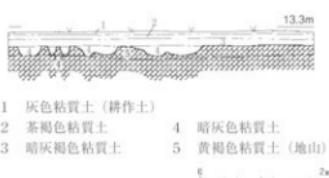
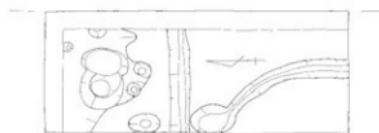
- | | | |
|----------------|-----------|-----------|
| 1 淡灰色粘質土 (耕作土) | 4 黄褐色土 | 7 淡茶褐色粘質土 |
| 2 淡茶灰色粘質土 | 5 暗灰褐色粘質土 | 8 淡灰褐色粘質土 |
| 3 暗黄褐色粘質土 | 6 淡灰褐色粘質土 | 9 淡黄褐色粘質土 |

T 3



- | | | |
|----------------|---------|-------------|
| 1 淡灰色粘質土 (耕作土) | 3 灰褐色土 | 5 黄褐色土 (地山) |
| 2 茶褐色粘質土 | 4 暗灰褐色土 | |

T 4



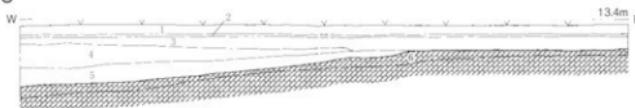
- | | |
|---------------|---------------|
| 1 灰色粘質土 (耕作土) | 4 暗灰色粘質土 |
| 2 茶褐色粘質土 | 5 黄褐色粘質土 (地山) |
| 3 暗灰褐色粘質土 | |

第6図 穂崎地区T 2～4平・断面図 (1/80)

T 5



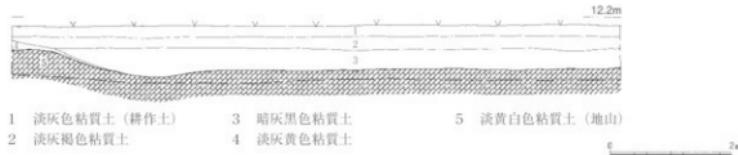
T 6



T 7

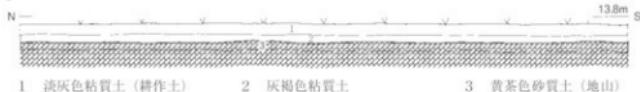


T 8

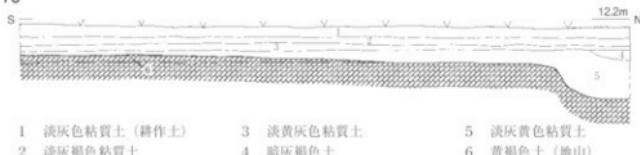


第7図 穂崎地区 T 5～8平・断面図 (1/80)

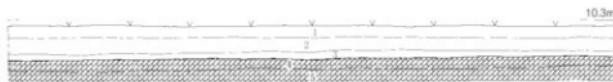
T 9



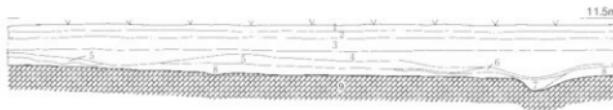
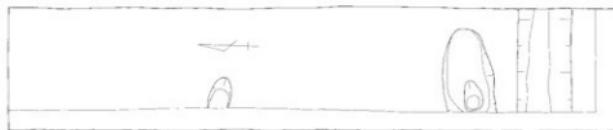
T 10



T 11

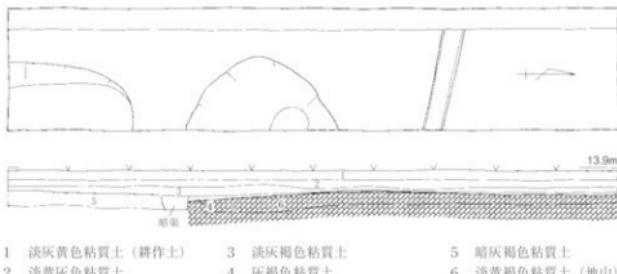


T 12

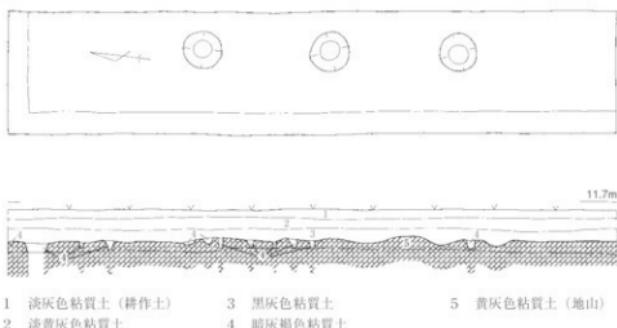


第8図 穂崎地区T 9～12平・断面図 (1/80)

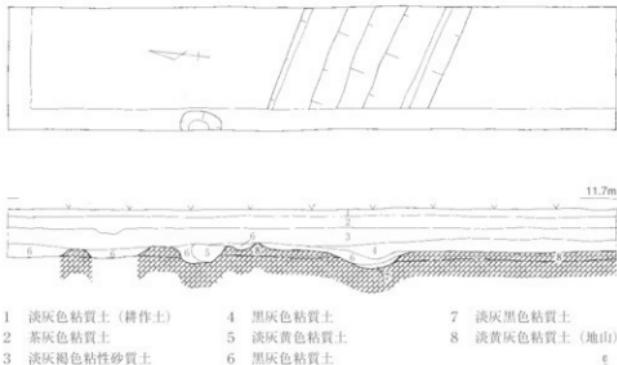
T 13



T 14



T 15



第9図 穂崎地区 T 13~15平・断面図 (1/80)

T18 (第4・10図)

主軸を北一南方向に設定し、調査規模は $2 \times 10\text{m}$ である。土層断面のうち第4層は地山である。遺構は確認されず、後世の削平が認められる。遺物は出土しなかった。

T19 (第4・10図)

主軸を北一南方向に設定し、調査規模は $2 \times 5\text{m}$ である。土層断面のうち第3層は地山である。遺構は確認されず、後世の削平が認められる。遺物は出土しなかった。

T20 (第4・10図)

主軸を北西一南東方向に設定し、調査規模は $2 \times 10\text{m}$ である。土層断面のうち第2層は地山である。遺構は確認されず、後世の削平が認められる。遺物は出土しなかった。

まとめ (第12図)

確認調査の結果、穂崎中次戸散布地は遺跡として、また、花熊丘陵散布地は丘陵西側裾部を穂崎鳥

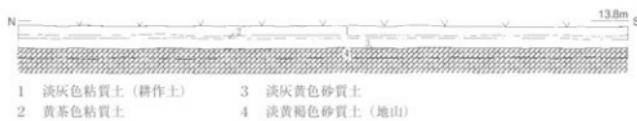
T16



T17



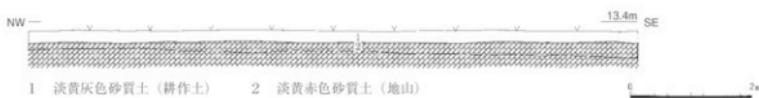
T18



T19



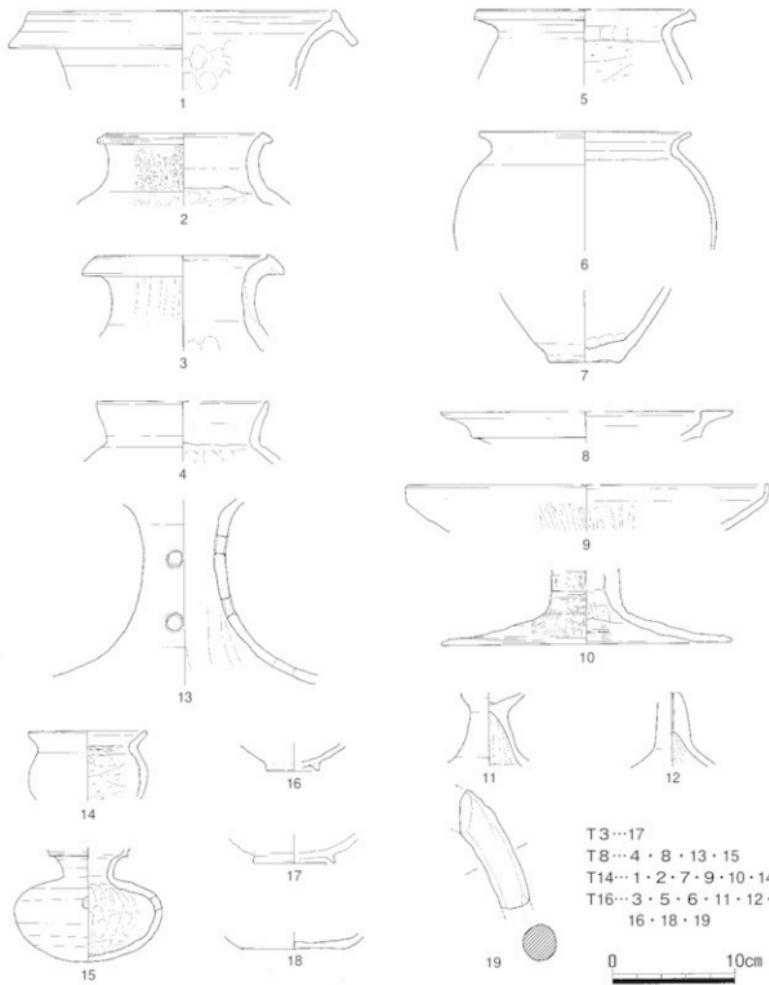
T20



第10図 穂崎地区 T16～20断面図 (1/80)

居遺跡、丘陵東側裾部を穂崎塙辛遺跡として確認することができた。各遺跡は出土遺物から弥生時代後期から古墳時代、および中世を中心とした時期が想定される。

ただし、今回は事業予定地外のために調査を実施しなかった丘陵頂部については、平野部に対して北方に延伸する舌状丘陵であるが、先の3遺跡よりも遺跡の立地条件がよいと思われる。同時期の集落や未周知の古墳などが存在した可能性も高いといえ、注視すべき地点である。



第11図 穂崎地区出土遺物 (1/4)



第12図 稲崎地区遺跡範囲図 (1/8,000)

第2節 穂崎西地区圃場整備予定範囲調査の遺構と遺物

T 1 (第13・14・19図・図版1-8、図版2-1)

仁王堂池南東側に主軸を北東—南西方向で設定した。調査規模は $2 \times 5\text{ m}$ である。遺構は柱穴3個を確認した。径は45~25cm、深さ20~15cmである。黒色土器碗21から10世紀代と判断できる。このほか、土師器・須恵器・瓦片などが出土した。

T 2 (第13・15図)

仁王堂池南東側に主軸を北東—南西方向で設定した。調査規模は $2 \times 2.5\text{ m}$ である。第6層は磨滅した土器小片を含む土層であり、第7層は地山である。遺構は確認されなかった。

T 3 (第13・15図)

仁王堂池東側に主軸を北東—南西方向で設定した。調査規模は $2 \times 5\text{ m}$ である。第3・4層は瓦などの包含層であり、第7・8層は地山である。遺構が確認されず、水田拡張の造成土や古い耕作土の下が地山となることから、本来の地形はかなり削られているとみられる。このほか、土師器・須恵器・瓦片などが出土した。

T 4 (第13・15図)

仁王堂池東側に主軸を北東—南西方向で設定した。調査規模は $2 \times 5\text{ m}$ である。第3・5層は瓦などの包含層であり、第6層は地山である。遺構は径約60cm、深さ15cmの不正円形の土壙が認められた。地山はT 3と同様に、かなり削られているとみられる。T 4東側の水田では、地山は東方に下降していく。このほか、土師器・須恵器・瓦片などが出土した。

T 5 (第13・16図・図版2-2)

仁王堂池北東側に主軸を北東—南西方向で設定した。調査規模は $2 \times 5\text{ m}$ である。第3~5層は瓦などの包含層であり、第9~11層は地山である。堆積土は厚く、地山が暗灰色の粘土であることから、東へ下降する谷にあたるとみられる。遺構は確認されなかった。遺物は須恵器・瓦片が出土した。

T 6 (第13・16・19図)

仁王堂池北東側に主軸を北東—南西方向で設定した。調査規模は $2 \times 5\text{ m}$ である。第4・8層は瓦などの包含層であり、地表下約45~73cmで地山になる。遺構は確認されなかった。

T 7 (第13・16図)

池新田遺跡南側に主軸を北西—南東方向で設定した。調査規模は $2 \times 5\text{ m}$ である。遺構・遺物は確認されなかった。池新田遺跡はこの付近で山陽道敷地内で終わっているとみられる。

T 8 (第13・16図)

池新田遺跡南側に主軸を北西—南東方向で設定した。調査規模は $2 \times 5\text{ m}$ である。遺構・遺物は確認されなかった。なお、耕作土中で埴輪片等の遺物がみられるが、北側の森山古墳付近から流れてきたものとみられる。

T 9 (第13・17図)

赤坂散布地北側に主軸を北西—南東方向で設定した。調査規模は $2 \times 4\text{ m}$ である。第4・5層は旧耕作土の可能性がある。遺構・遺物は確認されなかった。



第13図 比崎西地区トレーニング施設図 (1/5,000) (太線範囲は事業計画区域を示す)

T10 (第13・17図)

赤坂散布地南側に主軸を北西—南東方向で設定した。調査規模は 2×5 mである。第7・8層は地山である。遺構・遺物は確認されなかった。

T11 (第13・17図)

赤坂散布地東側に主軸を北西—南東方向で設定した。調査規模は 2×5 mである。第1層には埴輪片を含み、第4・5層からは鎌倉時代の土器が出土した。第6・7層は地山である。遺物の出土状況からみて、本来の遺跡はトレンチよりも南の高所に所在しており、そこから流れ込んだものと推測される。遺構は確認されなかった。このほか、須恵器片などが出土した。

T12 (第13・17図)

赤坂散布地に主軸を北—南方向で設定した。調査規模は 2×5 mである。耕作土直下に近い南側から北側に深くなる第4層から、やまとまつて5世紀代の土師器片が出土した。トレンチを中心とする範囲に同時期の集落が広がると判断でき、両宮山古墳の造営に関わるかもしれない。遺構はトレンチ中央付近で径15cm、深さ10cm程度の柱穴2基を確認したが、周辺に想定される遺構の残存状態は良くない可能性が強い。

T13 (第13・17図・図版2-3)

赤坂散布地に主軸を北—南方向で設定した。調査規模は 2×5 mである。第5層からごく少量の土師器片が出土したが、このことはT12と同様の想定ができると判断される。第6層は地山である。遺構は確認されなかった。

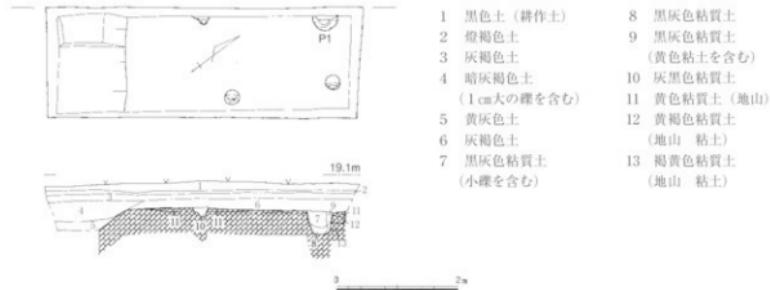
T14 (第13・18・19図)

仁王堂池東側に主軸を北東—南西方向で設定した。調査規模は 2×5 mである。第5層は瓦・須恵器片などを多く包含する。遺構は確認されなかった。地山はT3と同様に、かなり削られているとみられる。T14東側の水田では、地山は東方に下降している。

T15 (第13・18・19図)

仁王堂池東側に主軸を北東—南西方向で設定した。調査規模は 2×6 mである。第6・7層は瓦などを多く包含する。地山はT3と同様に、かなり削られているとみられる。遺構はトレンチ南西側で

T 1



第14図 穂崎西地区T 1平・断面図 (1/80)

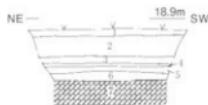
南西方向に下がる深さ約30cmを測るたわみを確認した。西方の堤側が深くなつており、かつては南北方向の広い水路が設けられていたとみられる。

T 16 (第13・18・19図・図版2-4)

仁王堂池東側に主軸を北東—南西方向でT 16A・16Bとして設定した。調査規模はT 16Aが 2×3 m、T 16Bが 2×2.5 mである。T 16Aの第6層は瓦・埴輪片などを包含する土層であり、第7層は地山である。遺構は確認されなかつた。このほか土師器・須恵器片が出土している。

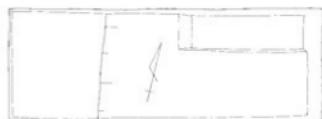
T 16Bの第8層は地山である。遺構は径45cm、柱痕直径20cmの柱穴1基を検出した。地山はT 3と同様に、かなり削られているとみられる。T 15と同様に、西方の堤側が深くなつており、かつては南北方向の広い水路が設けられていたとみられる。このほか土師器・須恵器片が出土している。

T 2



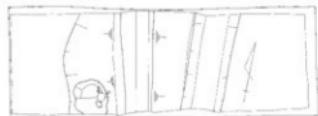
- | | | | |
|---|------------|---|--------------------------------|
| 1 | 褐色黑色土（耕作土） | 6 | 黄灰色砂質土
(2cmの大の礫を含む) |
| 2 | 黄灰色粘質土 | 7 | 黄色粘質土
(地山 暗褐色粘質土が
底状に入る) |
| 3 | 暗灰色粘質土 | | |
| 4 | 褐色粘質土 | | |
| 5 | 明黄色粘質土 | | |

T 3



- | | |
|---|---|
| 1 | 暗灰色粘質土（耕作土） |
| 2 | 褐色粘質土 |
| 3 | 明黄色粘質土 |
| 4 | 黄色粘質土 |
| 5 | 暗灰色粘質土
(3cm前後の礫を含む) |
| 6 | 暗灰色粘質土 |
| 7 | 明黄色粘質土
(地山 3~5cmの礫を含む) |
| 8 | 灰褐色粘質土
(地山 5mm大の細礫、2~5cmの
礫を含む 以下礫層になる) |

T 4



- | | |
|---|--------------------------|
| 1 | 暗灰色粘質土 |
| 2 | 赤褐色粘性砂質土
(間層部分は灰色) |
| 3 | 黄灰色粘質土（砂を含む） |
| 4 | 明黄褐色粘質土
(砂を含む マンガン沈着) |
| 5 | 灰色粘質土（瓦を含む） |
| 6 | 黄褐色粘質土（地山） |

第15図 穂崎西地区T 2~4平・断面図 (1/80)

T 17 (第13・18・19図)

仁王堂池東側に主軸を北東—南西方向で設定した。調査規模は $2 \times 5\text{ m}$ である。第5層は瓦などの包含層であるが、第6層とともに地山の可能性がある。T 17が位置する東側の水田では、地山は東方に下降していく。遺構は確認されなかった。地山はT 3と同様に、かなり削られないとみられる。

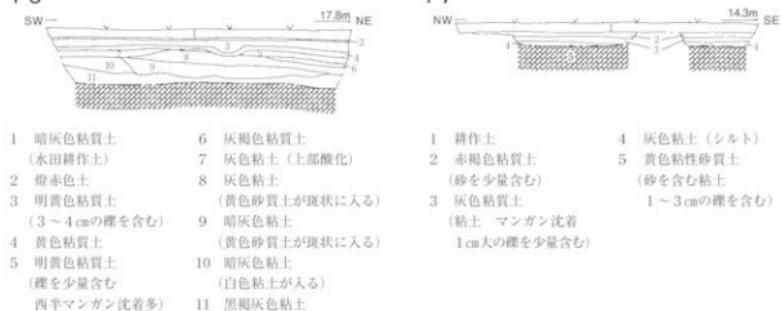
まとめ

確認調査の結果、仁王堂池南および東側に設定したT 1～4・14～17にかけては、主に平安時代の備前国分尼寺跡あるいはその関係の遺跡の広がりが確認された。また、赤坂散布地にあたるT 12付近

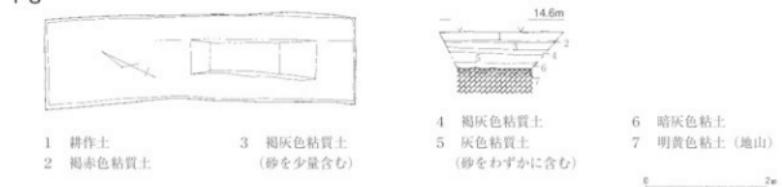
T 5



T 6



T 8



第16図 穂崎西地区 T 5～8平・断面図 (1/80)

T 9



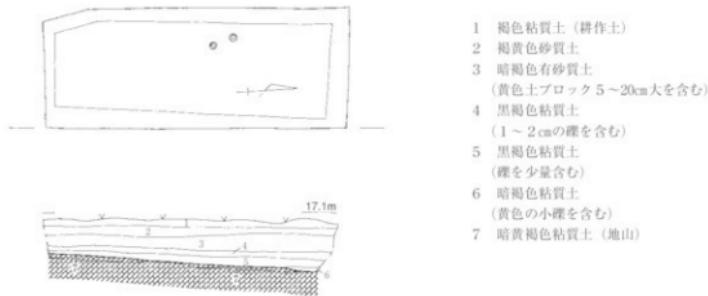
T 10



T11



T 12

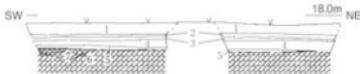


T 13



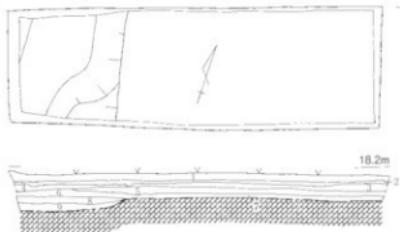
第17図 穂崎西地区 T 9~13平・断面図 (1/80)

T 14



- 5 黄色粘質土 (3 ~ 5 cmの礫を多く含む)
6 明黄色粘質土 (地山 わずかな砂質土と1 ~ 4 cmの礫を含む
東半マンガン沈着多)
7 暗褐色礫層
(地山 1 ~ 3 cmの礫を含む)

T 15



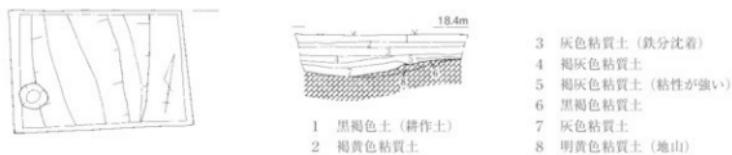
- 4 喷蒸褐色粘質土
(黄色土ブロックを含む)
5 暗灰褐色粘質土
(黄色土ブロックを含む
部分的に砂を多く含む)
6 明黄色粘質土
(上部砂を多く含む)
7 灰色粘質土
8 灰色砂質土
9 暗灰色粘質土

T 16 A



- 3 黄灰色粘質土
4 暗褐色粘質土
5 灰色粘質土 (鉄分沈着)
6 暗褐色灰色粘質土
7 明黄色粘質土 (地山)
8 灰色砂質土

T 16 B



- 3 灰色粘質土 (鉄分沈着)
4 暗褐色粘質土
5 暗褐色粘質土 (粘性が強い)
6 黑褐色粘質土
7 灰色粘質土
8 明黄色粘質土 (地山)

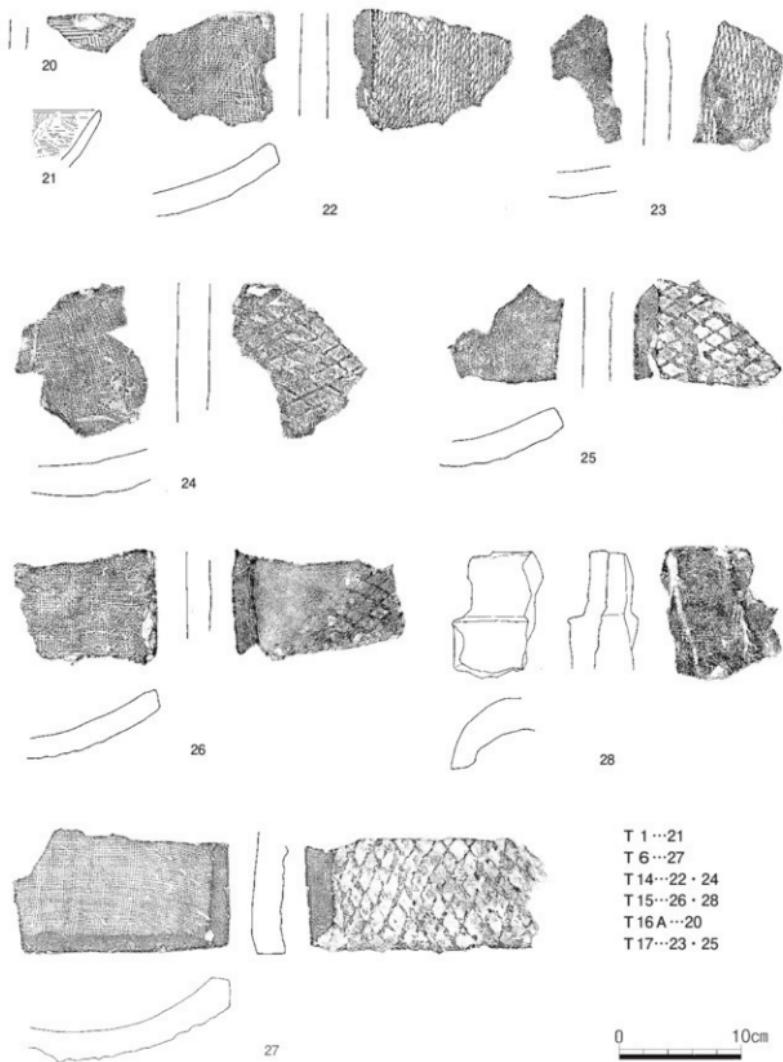
T 17



- 4 明灰色粘質土
(砂を含む マンガン沈着)
5 灰色粘土
(地山?)
6 黄色粘土 (地山 灰色
粘土が稜柱状に入る)

第18図 穂崎西地区 T 14~17平・断面図 (1/80)

には、5世紀代の集落が所在することが明らかとなり、赤坂遺跡として認識される状況であった。一方、池新田遺跡はT7・8の状況から、おおよそ現在の山陽敷地内で遺跡の広がりが終わっているとみられる。



第19図 穂崎西地区出土遺物 (1/4)

第3節 穂崎西地区圃場整備工事立会の遺構と遺物

穂崎西地区圃場整備事業は、平成19～22年度の予定で施工されている。確認調査結果を受け、備前国分尼寺跡に関係するとみられる建物の柱穴を検出した仁王堂池南東の一角（T1・2）と、5世紀の土器包含層を確認した赤坂遺跡の範囲（T12・13）は、施工対象から除外された（第13図）。また、仁王堂池東側の備前国分尼寺跡に関係する遺跡の範囲では水田面の切り下げを行ことなく施工されることとなった。

施工に際しては、遺構は認められなかつたが、備前国分尼寺跡から流出したと考えられる瓦が出土した仁王堂池北東側や、掘削面積が狭小な用・排水路部分について、必要に応じて工事立会を行つた。

第20図A～Eは確認調査で判明した備前国分尼寺跡に関係する遺跡範囲の外側にあたる部分で、第21図にその土層柱状図を示した。水田耕作に関わる土層を取り除くと、黄灰色粘質土および黒灰色粘質土の地山が確認され、遺構は遺存していないと考えられる。

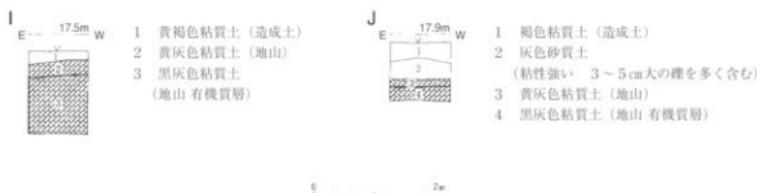
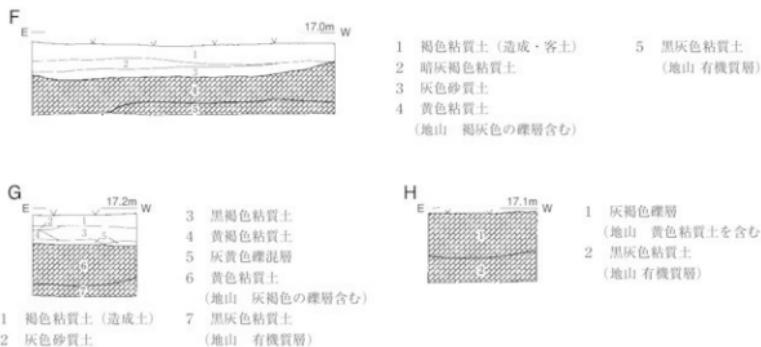
第20図F～Jが圃場整備の用・排水路掘削に伴うもので、第22図にその土層柱状図を示した。客土の下に厚さ5～34cmで砾を含んだ粘性のある灰色砂質土が認められ、瓦や土器を包含していた。この土層は東に向かって下降し堆積しており、西方の備前国分尼寺跡からの遺物が流出し堆積した状況と考えられる。地山は黄色および黒灰色の粘質土であり、東に下降していく。この立会によって、仁王堂池北東側および東側の状況について、確認調査結果を追認することができた。



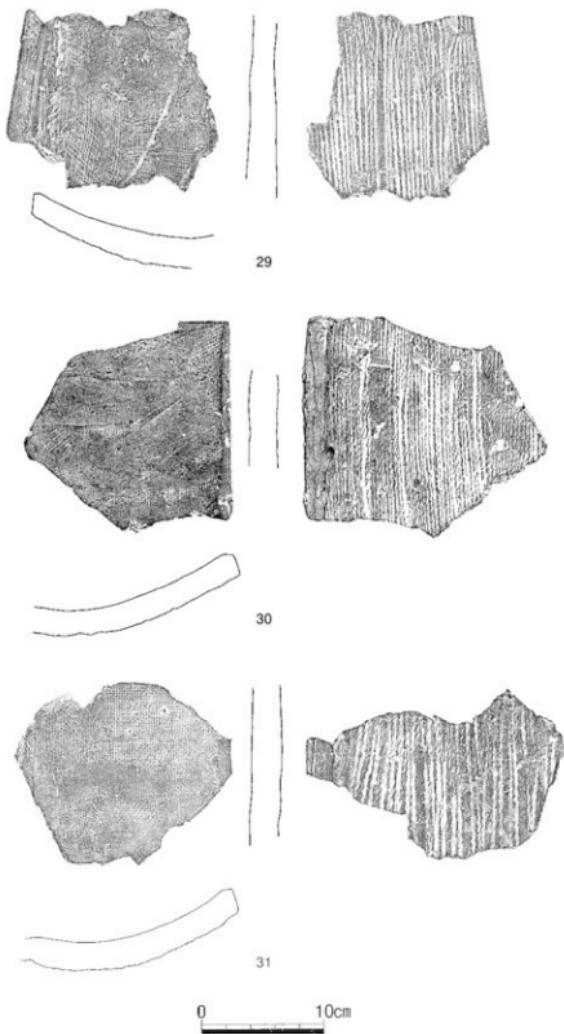
第20図 穂崎西地区遺跡範囲図・工事立会位置図（1/5,000）



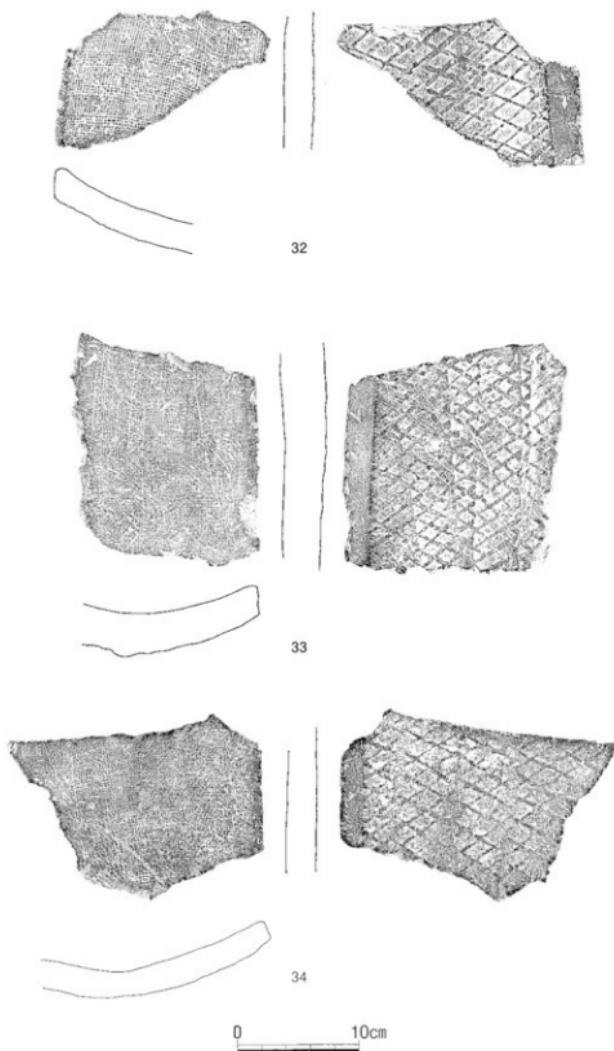
第21図 稲崎西地区工事立会土層柱状図① (1/80)



第22図 稲崎西地区工事立会土層柱状図② (1/80)



第23図 仁王堂池北東部周辺表探遺物① (1/4)



第24図 仁王堂池北東部周辺表採遺物② (1/4)

第23～25図に掲載した平瓦、丸瓦は、工事立会において出土あるいは表探したものである。

仁王堂池周辺は古くは礎石が認められ、また瓦類が多量に出土することから、備前国分尼寺跡に想定されてきた。池東端を寺域東辺に、また池南端を南辺、池北端を北辺とする、東西・南北とも一辺約140～150mの範囲がその寺域と考えられているが、池より東方の土層堆積状況や遺構密度の希薄さは、その想定を現段階で補強するものといえる。



第25図 仁王堂池北東部周辺表探遺物③ (1/4)



1 穂崎地区調査前全景（南西から）



2 穂崎地区調査風景（北東から）



3 穂崎地区 T 3 完掘状況（南西から）



4 穂崎地区 T 4 完掘状況（南から）



5 穂崎地区 T 13 完掘状況（南東から）



6 穂崎地区 T 15 完掘状況（北から）



7 穂崎西地区調査風景（西から）



8 穂崎西地区 T 1 完掘状況（南から）

図版2



1 穂崎西地区 T 1 柱穴（南東から）



2 穂崎西地区 T 5 完掘状況（南から）



3 穂崎西地区 T 13 完掘状況（北東から）



4 穂崎西地区 T 16B 完掘状況（南東から）



5 穂崎西地区工事立会地点全景（南西から）



6 穂崎西地区工事立会C地点土層（南東から）



7 穂崎西地区工事立会F地点土層（北から）



8 穂崎西地区工事立会H地点土層（北西から）

報告書抄録

ふりがな	ほさきなかじといせき ほさきとりいいせき ほさきおからいせき びぜんこくぶにじあと いけしんでんいせき あかさかいせき						
書名	徳崎中次戸遺跡 徳崎鳥井遺跡 徳崎塩辛遺跡 須前国分尼寺跡 池新田遺跡 赤坂遺跡						
副書名	県営徳崎地区・徳崎西地区開場整備事業に伴う確認調査						
卷次							
シリーズ名	赤磐市文化財調査報告						
シリーズ番号	4						
編著者名	澤山孝之 有賀祐史						
編集機関	岡山県赤磐市教育委員会						
所在地	〒709-0816 岡山県赤磐市下市337番地 TEL 086-955-0710						
発行機関	岡山県赤磐市教育委員会						
所在地	〒709-0816 岡山県赤磐市下市337番地 TEL 086-955-0710						
発行年月日	2010年3月15日						
所取遺跡名	所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
	市町村	遺跡番号					
徳崎中次戸遺跡	徳崎1001-1ほか	33213	247	34°44'5" 134°0'44"			
徳崎鳥井遺跡	徳崎1141ほか	33213	250	34°44'11" 134°0'48"	2000.6.12～ 2000.8.10	350m ²	
徳崎塩辛遺跡	徳崎1175ほか	33213	250	34°44'11" 134°0'48"			県営徳崎地区・徳崎西地区開場整備事業に伴う確認調査
須前国分尼寺跡	徳崎214ほか	33213	230	34°44'7" 134°0'4"			
池新田遺跡	徳崎540-1ほか	33213	235	34°44'13" 134°0'50"	2004.11.4～ 2004.12.1	130m ²	
赤坂遺跡	徳崎309-1ほか	33213	236	34°44'3" 134°0'17"			
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
徳崎中次戸遺跡	集落	弥生時代～古墳時代・鎌倉時代	土壙溝	弥生土器 土師器 須恵器 土師質土器 石獅			
徳崎鳥井遺跡	集落	弥生時代～古墳時代	土壙溝	弥生土器 土師器 須恵器 石獅			
徳崎塩辛遺跡	集落	弥生時代～古墳時代・鎌倉時代	土壙溝	弥生土器 土師器 須恵器 土師質土器 石獅			
須前国分尼寺跡	寺	奈良時代～平安時代	溝柱穴	土師器 須恵器 埴輪 黑色土器 瓦			
池新田遺跡	集落	弥生時代～古墳時代			遺跡は現在の山陽道敷地内で広がりが終わっているとみられる。		
赤坂遺跡	集落	古墳時代	柱穴	土師器			

要 約	<p>穂崎中次戸道跡 この道跡は穂崎中次戸散布地と周知されていたが、今回の確認調査によって弥生時代～古墳時代・鎌倉時代の道跡として認めることができた。</p> <p>穂崎鳥居道跡 この道跡は花熊丘陵散布地の一部として周知されていたが、丘陵東側裾部に広がる弥生時代～古墳時代の道跡として認めることができた。ただし、その主体は丘陵頂部に存在した可能性が高い。</p> <p>穂崎塩辛道跡 この道跡は花熊丘陵散布地の一部として周知されていたが、丘陵東側裾部に広がる弥生時代～古墳時代・鎌倉時代の道跡として認めることができた。ただし、その主体は丘陵頂部に存在した可能性が高い。</p> <p>備前国分尼寺跡 この寺跡の北東に当たる仁王堂池南および東側では、主に平安時代の備前国分尼寺跡あるいはその関係の遺構の広がりが確認された。また、わずかながら埴輪片が包含層から出土した。</p> <p>池新田道跡 この道跡は弥生時代～古墳時代の集落と周知されているが、今回の調査では遺構・遺物は確認されず、現在の山陽道敷地内で道跡の広がりが終わっているとみられる。</p> <p>赤坂道跡 この道跡は赤坂散布地として周知されていたが、古墳時代（5世紀代）の集落道跡として認めることができた。両宮山古墳の造営との関連で注視すべきである。</p>
-----	---

赤磐市文化財調査報告 第4集

穂崎中次戸遺跡
穂崎鳥井遺跡
穂崎塩辛遺跡
備前国分尼寺跡
池新田遺跡
赤坂遺跡

県営穂崎地区・穂崎西地区圃場整備事業に伴う確認調査

平成22年3月15日 印刷
平成22年3月15日 発行

編集・発行 岡山県赤磐市教育委員会
岡山県赤磐市下市337番地

印 刷 西尾総合印刷株式会社
岡山県岡山市北区津高651
